

A-7

分裂構文と疑似分裂構文の区別と使用における前提：シダーマ語の事例からの考察

河内 一博

防衛大学校

kazuhirokawachi@gmail.com, kawachi@nda.ac.jp

発表要旨：英語のような言語の場合、分裂構文と疑似分裂構文は形式上区別される。シダーマ語では分裂構文（と思われる構文）と疑似分裂構文（と思われる構文）に名詞句を形成するクリティックを使う。前者は「節=*hu* 焦点=*ti*」という形式あるいはその倒置の形式「焦点=*ti* 節=*hu*」を取るが、後者では節に付くクリティックが形成される名詞句の指示対象と性と数において一致を示し、形式上どちらであるか判断ができない場合がある。これらの構文は主部の節に対しての焦点の構成素の文法関係によりある程度の相補分布を示すが、どちらの構文も容認される場合があり、両者は形式および文法関係において互いに重なり合う部分がある。また、節の内容の聞き手の知識の前提に関して分裂構文と疑似分裂構文の談話における使用範囲がどのように違うかについては異なる考えがある (e.g. Prince 1978, Declerck 1988)。シダーマ語の場合、英語等の言語でのこれらの構文の使用に必要であると言われる語用論的前提や話題性的前提が存在しない場合にも使われている事例が多くあることを指摘し、その原因を考える。

1. はじめに

1.1 本研究の目的 本研究の目的は 2 つある。第一に、英語のような言語においてとは違って、シダーマ語（エチオピア、アフロ・アジア大語族、ハイランド・イースト・クシ）では分裂構文と疑似分裂構文と思われる構文（以下でそれぞれ「分裂構文」と「疑似分裂構文」と呼ぶ）が (i) 形式からどちらであるかはつきりしない場合があること、(ii) 主部を構成する節に対しての焦点の構成素の文法関係によって使用がある程度決まってくるが、どちらの構文も使える場合があることをデータで示すことである。第二に、特に分裂構文は、先行研究で他の言語での分裂構文と疑似分裂構文の使用に必要であると言われる前提が存在しない場合にも使われている事例が多くあることを指摘し、その原因についての仮説を立てることである。

1.2 シダーマ語の文法的特徴の概略 シダーマ (/sidaáma/) 語はエチオピア中南部で約 300 万人に話されている (2007 年エチオピア国勢調査による)。基本語順は SOV であるが、語順は比較的自由である。接尾辞を使う言語で、対格型の形態的格標示をする。名詞に文法的性（女性または男性）がある。

表 1: シダーマ語の名詞句形成クリティック (単数)

用法 格		性	
		女 性	男 性
(A)	対格・斜格	= <i>ta</i>	= <i>ha</i>
	主格	= <i>ti</i>	= <i>hu</i>
	属格	= <i>te</i>	= <i>hu</i>
(B)	述部 “修飾”されていない普通名詞、属格の“修飾”されている普通名詞、属格の固有名詞、属格の代名詞、形容詞、関係節	= <i>te</i>	= <i>ho</i>
		属格でない“修飾”されている普通名詞、属格でない固有名詞、属格でない代名詞	
(C)	補節マーカー	= <i>ta</i>	= <i>ha</i>

シダーマ語には名詞句を形成するクリティックとして、単数：=*ta* (女性) /=*ha* (男性)、複数：=*re* がある (以下で、NPC: noun-phrase clitic)。NPC には 3 つの機能がある。(A) 属格の名詞句または関係節に付き、項の名詞句 (の一部) を形成する、(B) 形容詞、名詞句、属格の名詞句、関係節のどれかに付き、述部を形成する、(C) 補節マーカー (complementizer) として節に付き、補節 (clausal complement) を形成する (Kawachi 2011)。NPC の単数形は、形成された名詞句の指示対象の性、および形成された名詞句の文全体における格 ((B) の場合、さらには NPC が付く構成素のタイプ) によって表 1 に示した形式を取る ((C) はほとんどの場合 =*ta* を取る)。複数形は (A) のみに使われ、対格・斜格は =*re*、主格および属格は =*ri* という形式を取る。

本研究に関連しているのは、用法 (A) の主格の形式と用法 (B) の述部の形式である (例：(1))。

- (1) *íse fušš-a dand-i-i-t-anno = hú šoóle č'álla = ho.*
 3SG.NOM carry-INF can-EP-LV-3SG.F-IPFV.3=NPC.NOM.M four only=NPC.PRED.M
 「船が運べるのは 4 つだけだ。」 ‘The ones (lit. one (M)) that she (= the ship) can carry are only four (things).’
 (Conversation2017.3-2: 020A_170304_1845)

シダーマ語にはコピュラの動詞はなく、NPC の用法 (B) の述部を形成する形式がコピュラの機能を果たす。表 1 にあるように、この用法で NPC が例えば“修飾”されていない (修飾語も所有人称接尾辞も伴っていない：Kawachi & Tekleselassie 2012) 普通名詞や形容詞に付く場合は、=*te* (女性) /=*ho* (男性) (例：(2a), (2b))、“修飾”されている (修飾語か / と所有人称接尾辞を伴う) 普通名詞に付く場合は、性と数に関係なく =*ti* (例：(3)) という形式を取る。(=*ti* の形式は *t* で始まっているので形式的には女性形と考えられる。)

- (2) *kú'u* (a) *dánča = ho* / (b) *hándo = ho*. (3) *kú'u* *dánča* *handó-o = ti*.
 that.M.NOM good=NPC.PRED.M/ox=NPC.PRED.M that.M.NOM good ox-LV=NPC.PRED
 「それは (a) 良い / (b) 雄牛だ。」 「それは良い雄牛だ。」
 ‘That one (M) (a) is good / (b) is an ox.’ ‘That one (M) is a good ox.’

この言語では、文脈から何を表しているかが明らかな場合は省略が起こることが多い。特に主語の性（や動詞の場合人称）の情報が述部に示されているので、述部のみが起こることがしばしばある。（主語の性に関係なく使われる = *ti* も単独で起こることがある。）

2. 先行研究

英語の場合、分裂構文 (*It*-cleft) と疑似分裂構文 (*WH*-cleft, ‘*the one*’ cleft) は形式上区別される (Lambrecht 2001)。また、焦点が名詞句 (名詞節 (noun clauses; Dryer 2007: 203–204) を含む) でなければならぬ (疑似分裂構文) か、そうでないか (分裂構文) によっても区別される。また、分裂構文と疑似分裂構文は言い換えが可能であるという考え (e.g. Akmajian 1970, 1979) に対する批判としては、Prince (1978) や Declerck (1988) がある。Declerck (1988: 69–74) によると、*WH*-cleft (例: *What I don’t eat is food for the dog*) には指定的 (specificational) なもの (‘It is food for the dog that I do not eat’ という解釈) と叙述的 (predicational) なもの (‘Whatever I do not eat is used as food for the dog’ という解釈) があるのに対し、*It*-cleft は常に specificational である。

Prince (1978) によると、英語の (指定的な) *It*-cleft と *WH*-cleft は談話における使用範囲が異なるという。*It*-cleft には、節の内容を聞き手が知っているという前提が話し手にあり、談話を始めるのには使えない通常の ‘stressed-focus *it*-clefts’ (e.g. *It was his keys that John lost*) に加えて、節の内容が聞き手が知っている内容ではない ‘informative-presupposition *it*-clefts’ (例: (4), (5)) がある。

- (4) However, it turns out that there is rather interesting independent evidence for this rule and it is to that evidence that we must now turn. (Akmajian & Wasow 1975: 221)
 (5) It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. (Prince 1978: 898)

これに対して Declerck (1988: 210–242) は、*It*-cleft だけでなく *WH*-cleft にも ‘stressed-focus clefts’ (Declerck の言う ‘contrastive clefts’) と ‘informative-presupposition clefts’ があり、さらには後者には 2 つのタイプ — ‘unaccented-anaphoric-focus clefts’ (e.g. (4)) と ‘discontinuous clefts’ (e.g. (5)) — があると主張する。‘Unaccented-anaphoric-focus clefts’ では節が新情報を伝え、焦点はその後の談話では話題とはなりにくいが、前の談話から引き継いでいる話題であり、この構文は談話を始めるのには使えない。‘Discontinuous clefts’ においては、節も焦点も新情報を表し、この構文は談話を始めるのに使うことができ、焦点あるいは節の内容はそれ以降の談話で話題となる可能性がある。どちらの構文においても節は新情報をあたかも既知の情報であるかのように伝える。

Lambrecht (2001) は分裂構文と疑似分裂構文で焦点になっていない節の内容に関する前提として、3 種類を区別している: (i) 知識の前提 (knowledge presupposition; いわゆる pragmatic presupposition) (e.g. Dryer 1996)、(ii) 意識の前提 (consciousness presupposition) (Gundel et al. 1993)、(iii) 話題性の前提 (topicality presupposition)。 (ii) は (iii) の必須条件であるということで、(i) と (iii) のみを扱っている。Lambrecht (2001: 469) は ‘informative-presupposition clefts’ は慣習化されているが文法の一部にはなっていない pragmatic accommodation (Lambrecht 1994) による特別なものとして考え、主に ‘stressed-focus clefts’ を扱っていて、これらの前提は分裂構文の文法にもどのような疑似分裂構文の文法にも同じように含まれていると考えている。

しかし、分裂構文と疑似分裂構文の区別にしても、これらの構文の使用における前提に関しても、ヨーロッパの言語のデータを中心に述べられている傾向がある。どの程度他の言語にも当てはまるのか明らかではない。本研究ではシダーマ語を取り上げ、これらのことが当てはまるかどうか調べる。

シダーマ語と関連があると考えられている他のイースト・クシの言語には、独特の焦点の標示方法があることが報告されている。ソマリ語では、indicator particles と呼ばれる焦点を標示する不変化詞があり、そのうちの一つは肯定文において必ず焦点になっている構成素を示すのに使われる (e.g. Hetzron 1965, Antinucci 1980)。アファル語 (Afar または Qafar) では、有標主格言語で目的語に使われる格 (absolute case と呼ばれる格) と関係節化により、あるいは疑問文では疑問のマーカにより、焦点になっている構成素を示す。ところが、このどれにも相当するような焦点の標示方法はシダーマ語にはない。

3. シダーマ語の分裂構文・疑似分裂構文のデータ

3.1 シダーマ語の分裂構文と疑似分裂構文の形式上の区別と焦点の文法関係 シダーマ語の分裂構文と疑似分裂構文は (6) の形式を取る。それぞれの構文をこれらの名前で読んでいるのは、分裂構文の節 = *hu* が非指

示的で焦点に名詞句以外の構成素が起こりうるのに対し、疑似分裂構文の節 = *ti* または節 = *hu* は指示的で焦点は常に名詞句であるためである。

- (6) 分裂構文： 常に、「節 = *hu* 焦点 = *ti*」か「焦点 = *ti* 節 = *hu*」
 疑似分裂構文： 焦点の名詞句の指示対象が男性の場合、「節 = *hu* 焦点 = *ti*」か「焦点 = *ti* 節 = *hu*」
 焦点の名詞句の指示対象が女性の場合、「節 = *ti* 焦点 = *ti*」か「焦点 = *ti* 節 = *ti*」

形式が「節 = *ti* 焦点 = *ti*」か「焦点 = *ti* 節 = *ti*」である場合は明らかに疑似分裂構文だが、「節 = *hu* 焦点 = *ti*」あるいは「焦点 = *ti* 節 = *hu*」はその形式からは分裂構文と疑似分裂構文のどちらなのか判断できない。

これらの構文で、1.2 で述べた NPC の主格の形式 = *ti* (女性) / = *hu* (男性) が節に付いて主部の主要部欠如型関係節 (以下の例文で [] で示す) を形成し、NPC の述部に使われる形式 = *ti* が焦点となる構成素に付いて述部 (以下の例文で下線で示す) を形成する。分裂構文は (形成された名詞句の指示対象があると想定した場合の、その) 性と数に関係なく「節 = *hu* 焦点 = *ti*」という形式で、しばしば順番が逆に「焦点 = *ti* 節 = *hu*」となる (例: (12), (13))。焦点の構成素としては名詞句、副詞句・節 (例: (7))、副動詞 (例: (8))、補節 (例: (11)) 等、様々なものが起こりうる。

- (7) [*dancá manna ikk-ø-ino = hú*] *bé'ro-o = ti.*
 good.ACCOBL people become-3SG-D.PRF.3=NPC.NOM.M yesterday-LV=NPC.PRED
 「シダーマ族が独立したのは最近だ。」‘It is recent (*lit.* yesterday) that the Sidaama people became independent (of the Amhara people) (*lit.* became good people).’ (Conversation2017.7-8: 005A_170721_1422) (会話の参加者は過去にシダーマ族がアムハラ族の支配下にあったことについて話していて、話し手には聞き手が現在はアムハラ族から独立していることを知っているという前提がある。)
- (8) [*áni gat-oo-mm-o = hú*] *wošš-á*
 1SG.NOM remain-D.PRF.1-1SG-M=NPC.NOM.M call-INF.ACCOBL
hoog-ø-e-é = nna-’e-e = ti.
 not.do-3SG.M-CVB-LV=and-1SG-LV=NPC.PRED
 「私が行かなかったのは彼が私を招かなかったからだ。」‘It is because (*lit.* after) he did not invite me that I (M) did not (go to this wedding).’ (Conversation2017.3-4: 008A_100101_0214) (会話の参加者は行かなかったある人の結婚式について話していて、この発話では話し手が行かなかった理由を説明している。)

ただし、焦点の構成素が名詞句で、それが構文全体の主語を NPC と形成している節の主語の場合は、その NPC は焦点の名詞句と性と数の一致を示さなければならない (例: (9) (多くの話者にとって複数の一致は随機的))。 (9) は「節 = *hu* 焦点 = *ti*」という形式を取っているので分裂構文のように見えるが、焦点の名詞句が単数・女性の場合 (例: *hatteé leemmiččó-o = ti* (that.F bamboo.tree-LV=NPC.PRED)) は、主語は *mereeró-ho no-o = tí* となる (「真ん中にあるのはその竹の木だ」)。この場合、疑似分裂構文とみなすことができる。

- (9) ... [*mereeró-ho no-o = hú*] *hakkóe buusá-a = ti.*
 middle-LOC.M come.to.exist.D.PRF.3-LV=NPC.NOM.M that.M bridge-LV=NPC.PRED
 「真ん中にあるのはその橋だ。」‘... the one (M) that is in the middle is that bridge.’ (Conversation2017.7-1: 009C_170711_1829) (会話の参加者はそれまでこの橋について話していた。この話し手は 2 つの地域が分けられているということを言った直後にこの文を発した。)

焦点となる名詞句が、構文全体の主語を NPC と形成している節の目的語または接尾辞を伴わない間接目的語である場合は、疑似分裂構文が好まれるが、分裂構文の使用もある程度容認され実際に使われている。例えば (10) で、*macc’a* ‘ear’ は女性名詞で、主節の最後の NPC に = *ti* を使って疑似分裂構文を形成するのが普通だが、男性形の = *hu* が使われている。

- (10) ... *adđ-an-t-iwó = kki* *beetto* *guraččo macc’á-a = ti*
 marry-PASS-3SG.F-D.PRF.3=NEG child(GEN.F) left ear-LV=NPC.PRED
 [*k’as-i-d’-annó = hu*].
 pierce-EP-MID-3SG.F-IMPV.3=NPC.NOM.M
 「未婚女性が穴を開けるのは左耳だ。」‘It is her left ear that an unmarried girl pierces.’ (Conversation2017.7-3: 017A_100101_0821) (話し手は未婚女性が耳に穴を開けるということを聞き手が知っているという前提を持っていない。)

エリシテーションで、焦点の構成素が節の主語であるときは疑似分裂構文のみが使われ、焦点の構成素が節の目的語や接尾辞を伴わない間接目的語である場合は疑似分裂構文の方が分裂構文よりも好まれ、焦点の構成素が節の主語や目的語以外である場合は分裂構文しか使われないということがわかっていた。(ただより年齢が上の話者は、焦点が目的語や接尾辞を伴わない間接目的語であっても、分裂構文を使っているようで、この点は調査が必要である。) これを確かめるために、シダーマ語の 5 名の母語話者 (年齢: 21, 21, 24, 24, 25) に、分裂構文と疑似分裂構文の焦点の構成素が単数女性の名詞句である文を、焦点の名詞句の主部の節との文法関係を違えて、容認度の最高を 7、最低を 0 として容認度を判定してもらった。それぞれの条

件における被験者の構文の容認度評価の平均は表2の通りである。(焦点の名詞句の指示対象が複数の場合のデータも採ったが、性と複雑な関係があるので、ここでは取り上げない。表にあるように、名詞句以外の構成素である場合もテストした。) 焦点の名詞句が主語の場合は疑似分裂構文のみが容認され、目的語の場合疑似分裂構文の方が分裂構文よりも好まれ、焦点の名詞句が主部の節とその他の文法関係を持つ場合、および焦点となる構成素が名詞句でない場合は、分裂構文のみが容認されることがわかる。焦点の名詞句が間接目的語であるときは、与格の辞尾辞を伴わない場合は疑似分裂構文が好まれ、与格の辞尾辞を伴う場合は分裂構文が好まれる。有生性による違いはあまりないようである。

表2: 文法関係と有生性によるシダーマ語の分裂構文・疑似分裂と したがって、この言語で分裂構文と疑似分裂構文の容認度 (焦点が名詞句の場合、それは単数女性名詞句)

節に対しての焦点の構成素の 文法関係と有生性/タイプ		被験者の容認度評価の平均 (容認度最高: 7、最低: 0)	
文法関係	有生性	分裂構文 (節=hu 焦点=t)	疑似分裂構文 (節=ti 焦点=t)
主語	人間	0	7
	無生	0	6.8
目的語	人間	4.6	7
	動物	4.6	7
	無生	4.4	6.8
間接目的語 (接尾辞なし)	人間	2.8	6.8
	動物	3	7
間接目的語 (与格の辞尾辞を伴う)	人間	7	1.6
	動物	6.4	1
その他の文法関係		7	0
焦点の構成素が名詞句でない場合		7	0

があると考えられる。焦点となる構成素の文法関係は、疑似分裂構文がより容認される(分裂構文がより容認されない) 順番に(大雑把に)「主語>目的語>その他」となる。Keenan & Comrie (1977) と Comrie & Keana (1979) の Noun Phrase Accessibility Hierarchy をもとにして、Luo (2009) は分裂構文の焦点になりうる構成素の文法関係の階層(なりやすいものから順番に SUBJ > DO > IO > OBL > GEN > Obj of comparison) を提案しているが、(疑似分裂構文を含めずに考えると)シダーマ語の分裂構文はこの階層の上の部分の反証例になっている。ただ、シダーマ語のように節に対しての焦点の文法関係に関して疑似分裂構文と分裂構文が一部重なり合う不完全な相補分布を示す場合に、指示的になり易い階層の一番上にある主語に疑似分裂構文を使わなければならないという事は理解できるように思われる。

示す場合に、指示的になり易い階層の一番上にある主語に疑似分裂構文を使わなければならないという事は理解できるように思われる。

3.2 シダーマ語の分裂構文と疑似分裂構文の使用における前提 Tom Güldemann & Ines Fielder の共同研究プロジェクト“Predicate-centered focus types: A sample-based typological study in African languages”で使われたエリシテーション・キット (2011_03_02_Focus_Translation_PCF_.doc, 2011_kama-Test.doc, 2011_Short_Language_Profile.doc) を用いたダイアログ等のエリシテーションで、質問に対しての答えや前の話者の発言の否定として分裂構文・疑似分裂構文を使う場合、知識と話題性の前提を満たしたものが好まれるが、満たしていないものも全く不適切というわけではないことが多いことがわかった。

実際、シダーマ語の自然な会話のデータ(会話数 29、合計時間 109 分 54 秒)で分裂構文・疑似分裂構文を調べたところ、合計 76 例のうち、話し手が節の内容についての聞き手の知識を前提としていない事例が 22 例 (= 8+14)、話題性の前提になっていないと考えられる例が 24 例 (= 10+14)あった。¹ これらのうち、聞き手の知識の前提も話題性の前提も必要としていないと思われる例が 14 例あった。(主部または述部が一つの文で等位接続や言い換えにより二度現れている場合はそれぞれ 1 例と数えた。) 表3にデータを示す。

表3: シダーマ語の分裂構文・疑似分裂構文における知識の前提と話題性の前提

構文の種類	主部と述部の順序	合計 (76 例)	知識の前提と話題性の前提の両方あり (46 例)	知識の前提なし、話題性の前提あり (8 例)	知識の前提あり、話題性の前提なし (10 例)	知識の前提と話題性の前提の両方なし (14 例)
分裂構文	主部 - 述部	14 (100%)	7 (50%)	3 (21.4%)	1 (7.1%)	3 (21.4%)
	述部 - 主部	44 (100%)	24 (54.5%)	4 (9.1%)	7 (15.9%)	11 (25%)
疑似分裂構文	主部 - 述部	5 (100%)	4 (80%)	0 (0%)	1 (20%)	0 (0%)
	述部 - 主部	2 (100%)	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
分裂構文または疑似分裂構文	主部 - 述部	4 (100%)	3 (75%)	0 (0%)	1 (25%)	0 (0%)
	述部 - 主部	7 (100%)	7 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

¹ これらの構文は会話で起り易い。筆者が収集した Wallace Chafe の Pear Film の語りのデータ(被験者 21 名、合計 37 分 55 秒)では、9 例しか起っていない。それも語りの始め(2 例: いずれも ‘It is ... that I saw’ という内容)と終わり(6 例: ‘It is ... that I saw’ または ‘It is ... that the story ended’)に使われているだけで、語りの途中に使われた例はない。語りの最初と最後は、どちらも被験者が筆者と筆者の調査協力者に話の内容について説明している箇所で、会話に近いと言える。

この表で「分裂構文または疑似分裂構文」とは、焦点の名詞句が単数男性名詞で、節の目的語なので、分裂構文でも疑似分裂構文でも「節=*hu* 焦点=*ti*」か「焦点=*ti* 節=*hu*」の形式を取る場合である。(焦点が目的語の場合、性の一致を示す疑似分裂構文の方が容認度が高い(表2)ので、おそらくは疑似分裂構文と考えられる。)

(11) (10) も)、(12)、(13) にそれぞれ、知識の前提を必要としていない例、話題性の前提を必要としていない例、知識の前提も話題性の前提も必要としていない例を挙げる。

- (11) *[áni=nó mačč'iišš-oo-mm-o=hú] ... aé kinčo=nó*
 1SG.NOM=also hear-D.PRF.1-1SG-M=NPC.NOM.M any stone=even
ka-i-s-ø-e haa'r-ø-e uurr-i-s-ø-e
 rise-EP-CAUS-3SG.M-CVB take-3SG.M-CVB stand-EP-CAUS-3SG.M-CVB
k'ás-ø-anno=tá-a=ti.
 pierce-3SG.M-IPFV.3=NPC(COMP)-LV=NPC.PRED

「私も聞いたのは、彼がどんな石も持ち上げ、持って行き、立たせ、穴を開けるということだ。」‘What I (M) also heard is that ... he lifts, takes, stands up, and pierces any stone.’ (Conversation2017.7-2: 008C_170712_1251) (ある人物について話している会話だが、話し手は自身がこの人物について聞いたことがあることを聞き手が知っているという前提を持っていない。)

- (12) *sidaam-ú mann-í addánkanní roorunní*
 Sidaama-NOM.M people-GEN.M.MOD truly particularly
bun-ú latišš-i aaná-a=ti
 coffee-NOM.M production-GEN.M.MOD top-LV=NPC.PRED

「シダーマ族が本当に長時間の労働時間を費やしているのはコーヒーの生産だ。」‘It is on the production of coffee that the Sidaama people spend a really lot of working time, and ...’ (Conversation2016.7-2: 011A_160711_1216) (話し手は聞き手がこの事実について知っているという前提を持っているが、これまでシダーマ族のコーヒーの生産について話題になっていたものの、彼らが長い時間を費やすということは話題になっていない。)

- (13) ... *tógo t'aat-t'-é-e=ti [k'as-i-d'-d'-annó=hu].*
 like.this wrap-3SG.F-CVB-LV=NPC.PRED pierce-EP-MID-3SG.F-IPFV.3=NPC.NOM.M

「こういう風にまとめてからだ、未婚女性が髪をピンでとめるのは。」‘It is after she (an unmarried girl) wraps it (= her hair) like this that she pins it.’ (Conversation2017.3-5: 017A_100101_0821) (話し手は未婚女性が髪をピンでとめるということを知っているという前提を持っていないし、髪をピンでとめることは話題になっていない。)

4. シダーマ語の分裂構文が知識の前提と話題性の前提を必要としない理由についての仮説

合計 78 例のうち、知識の前提、話題性の前提のどちらか、または両方を必要としていない例は合計 32 例あった(表3の右の3つの欄の合計)。そのうち、分裂構文が 29 例あるのに対し、明らかに疑似分裂構文であるのは 2 例だけ、分裂構文であるかもしれないがおそらく疑似分裂構文であるのは 1 例だけのみである。(ただ、疑似分裂構文の例と疑似分裂構文と思われる例が合計で 18 例のみとデータのサイズが小さいので、もっと多くのデータを集める必要がある。)

前提を要する ‘stressed-focus *it*-clefts’ が ‘informative-presupposition clefts’ よりもはるかに無標の英語のような言語とは違って、シダーマ語では ‘informative-presupposition clefts’ がそれ程有標ではないのかもしれない。Declerck (1988: 228) によると、2つのタイプの ‘informative-presupposition clefts’ (‘unaccented-anaphoric-focus clefts’ と ‘discontinuous clefts’) はどちらも、述べていることが後の談話で重要になってくることを話し手が示したい (‘create suspense’) 時に使われる。その理由は新情報をあたかも既知であるかのように表すからであるという。シダーマ語の分裂構文で前提を要していない例は、特に後の談話で重要になってくる場合に限られているようには思えないが、実際そのような例 (e.g. (12)) はあり、少なくとも新しい情報をあたかも既知であるかのように表しているとは言えるかもしれない。2 節で述べたように、Lambrecht (1994, 2001) は ‘informative-presupposition clefts’ は分裂構文の文法の一部ではなく、慣習化されているが文法の一部にはなっていない pragmatic accommodation によるものと考えているが、英語のような言語とは違って、シダーマ語では分裂構文の文法の一部になっているということがあり得る。

一方で、知識の前提、話題性の前提のどちらか、または両方を必要としていない例は、分裂構文の通常の「節=*hu* 焦点=*ti*」という形式では 7 例しか起っていないのに対し、「焦点=*ti* 節=*hu*」という倒置の形式では 22 例も起っているということは注目すべきである。この事実から、聞き手の知識の前提を要しないのは、この言語の分裂構文においては、焦点の構成素に付く =*ti* が話題に対しての焦点マーカーのように機能

するようになってきているためであると仮説を立てることができる。特に分裂構文で節に付く NPC の =*hu* は音声的に弱く、倒置の形式「焦点 =*ti* 節 =*hu*」が起る場合は =*hu* が起らない形式「焦点 =*ti* 節」のみ、すなわち文の中で焦点に =*ti* が標示されているのと大きく変わらない。周辺の言語に焦点マーカがある言語があることを考えるとあり得ることもかもしれない（しかし、形式は =*ti* とは大きく異なる）。

ただ、「焦点 =*ti* 節 =*hu*」という倒置は、新しい情報が後に来るという通言語的傾向 (Prince 1978: 898) に反する。さらには、知識の前提、話題性の前提のどちらか、または両方を必要としていない例合計 32 例のうち、焦点の構成素のタイプを見てみると、補節 8 例（そのうち倒置が 6 例）、副動詞 5 例（そのうち倒置が 4 例）であった（知識の前提と話題性の前提の両方を必要としている例はそれぞれ 3 例と 4 例）。ということは、比較的長い構成素が焦点として前の方に起っていることになる。これらの点はもっと調査が必要である。

5. 結論

シダーマ語の分裂構文と疑似分裂構文と思われる構文は、それらの形式および焦点の構成素と節の文法関係において使用範囲が互いに重なり合う部分がある。また、他の言語でのこれらの構文の使用に必要であると言われる語用論的前提や話題性の前提が存在しない場合にも使われている事例が特に分裂構文（とりわけ倒置された形式）に見られる。その理由ははっきりとはわからないが、この言語の談話の構成のし方の特徴かもしれないし、 =*ti* が焦点マーカのように機能しているからなのかもしれない。

略号一覧 ABLINS: ablative-instrumental, ACCOBL: accusative-oblique, CAUS: causative, CVB: converb, D.PRF: distant perfect, EP: epenthesis, GEN: genitive, INF: infinitive, IPFV: imperfective, LV: lengthened vowel, M: masculine, MID: middle, MOD: Modified (accompanied by a modifier/modifiers, by the possessive pronominal suffix, or both), NOM: nominative, NPC: noun-phrase clitic, R.PRF: recent perfect

謝辞 シダーマ母語話者の調査協力者 Iyasu Gudura 氏、Legesse Gudura 氏、Genevieve Gudura 氏に感謝を申し上げる。本研究は、2015 年 11 月 3 日に Institut für Asien- und Afrikawissenschaften, Humboldt-Universität zu Berlin での African linguistics research colloquium において行なった発表 Information structure in Sidaama の一部を発展させたものである。コメントをくださった参加者（特に Tom Güldemann 氏、Ines Fielder 氏、森本雪子氏、Henok Wondimu Tadesse 氏）にお礼を申し上げたい。また 2017 年 9 月 27 日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において行なった東京アフリカ言語学研究会での発表の参加者 (Seunghun Lee 氏、品川大輔氏、中川裕氏、若狭基道氏) から貴重なコメントをいただき、本稿の修正に非常に役立ったので、感謝を申し上げたい。本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究課題番号 15H05157 (研究代表者: 河内一博) により可能になった。Pear Film のビデオ・ファイルは Mary Erbaugh 氏による。

参考文献

- Akmajian, Adrian. 1970. On deriving cleft sentences from pseudo-cleft sentences. *Linguistic Inquiry*, 1: 149–68.
- Akmajian, Adrian. 1979. *Aspects of the Grammar of Focus in English*. New York: Garland.
- Akmajian, Adrian, and Thomas Wasow. 1975. The constituent structure of VP and AUX and the position of the verb BE. *Linguistic Analysis*, 1: 205–246.
- Antinucci, Francesco. 1980. The syntax of indicator particles in Somali, part two: the construction of interrogative, negative, and negative-interrogative clauses. *Studies in African Linguistics*, 11.1: 1–37.
- Comrie, Bernard, and Edward L. Keenan. 1979. The Noun Phrase Accessibility revisited. *Language*, 55.3: 649–664.
- Declerck, Renaat. 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts*. Berlin & Boston: De Gruyter Mouton.
- Dryer, Matthew. 1996. Focus, pragmatic presuppositions, and activated propositions. *Journal of Pragmatics*, 26.4: 475–523.
- Dryer, Matthew. 2007. Noun phrase structure. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description, Volume 2: Complex constructions*, 2nd edition, 151–205. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frascairelli, Mara, and Annarita Puglielli. 2007. Focus in the force-fin system: Information structure in Cushitic languages. In Aboh, Enoch Oladé, Katharina Hartmann, and Malte Zimmermann. eds. *Focus Strategies in African Languages: The Interaction of Focus and Grammar in Niger-Congo and Afro-Asiatic*, pp. 161–184. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Gundel, Jeanette, Nancy Headberg, and Ron Zacharski. 1993. Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language*, 69.2: 274–307.
- Hetzron, Robeert. 1965. The particle *bāa* in Northern Somali. *Journal of African Languages*, 4, 118–130.
- Kawachi, Kazuhiro. 2011. Noun phrases without nouns in Sidaama (Sidamo). *LACUS Forum* 36 (2009), pp. 25–35.
- Kawachi, Kazuhiro, and Abebayehu Aemero Tekleselassie. 2012. Modification within a noun phrase in Sidaama (Sidamo). *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (2008), General Session*, pp. 187–198. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society.
- Keenan, Edward L., and Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8: 63–99.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud. 2001. A framework for the analysis of cleft constructions. *Linguistics*, 39.3: 463–516.
- Luo, Cheng. 2009. *Cleftability in Language*. China: Wuhan University Press.
- Prince, Ellen. 1978. A comparison of wh-clefts and it-clefts in discourse. *Language*, 54.4: 883–906.